

賀川豊彦の宗教思想と友愛

2009年5月17日

キャンパスイノベーションセンター東京・国際会議室
加山 久夫

I はじめに—「公共的知と賀川豊彦」によせて—

1909（明治42）年、21歳の賀川豊彦が神戸の貧民街に移り住んで救霊・救貧の活動を始めてから、1960（昭和35）年に没するまでの生涯において先駆的に関わった運動は、キリスト教伝道、セツルメント、労働運動、農民運動、普選運動、無産政党樹立運動、協同組合運動など、実にその幅は広く、多分野にわたっている。これらはすべて賀川にとっては「防貧」運動であり、出発点であった「救霊」・「救貧」からの発展的プログラムであった。これら多様な「防貧」プログラムは賀川において思想的に統合され、相互に有機的に関係したものであるとともに、「救貧」の思想と実践とも連続していた。

これらの社会活動の根底に賀川の思想があったことは言うまでもない。その意味で実践家賀川と思想家賀川は決して分離されてはならない。彼は一つの運動を起こすと、大抵、機関紙（誌）を発行し、小説を書き、教育の場を設け、実践のための平易なロゴスを紡ぎだし、人々を啓発した。200冊を超える彼の著作の大半は、何らかの形で彼の社会活動と関わっていると言えよう。つまり、彼の思想と実践は大抵社会改良のためであり、特に、社会的弱者の人間性の回復と解放を目的としたものであった。その詩ですら、決して芸術至上主義的な表現ではなく、社会や生活の現実を直観し、社会的に訴えるメッセージをもつ言葉であった。¹

したがって、賀川は驚くほど多分野にわたり知的探求心の旺盛な人であったが、宗教や経済学は言うまでもなく、生物学、数学、天文学などについても、知的好事家の知識欲といったものでも、主知主義でもなく、彼の中ではある目的をもつ知的探求であり、彼の思想と実践を展開するための営為であったと言えよう。

II 賀川豊彦の宗教思想—前史

豊彦は父純一の妾の子として生まれ、その父母も、4歳から5歳にかけて、相次いで病死し、徳島の父の本妻に引き取られるという、孤独な少年時代を過ごした。豊彦少年の孤独な心を慰めたものは、吉野川流域の自然であった。賀川が生涯にわたる自然への深い関心には、少年時代の自然体験が関わっているのではないかと思う。しかし、賀川少年に決定的な経験となったのは、二人のアメリカ人宣教師との出会いであった。彼は、14歳の時、C. A. ローガンから英語を学び、その中で「創世記」に興味を持ったという。後に、H. W. マイヤース宣教師の指導を受けるようになり、16歳の時、洗礼を受けた。彼らは米国南長老派の牧師であり、そのキリスト教理解は、明確な贖罪信仰に立つ、

¹ 拙文、「公共の神学と賀川豊彦」（「賀川豊彦記念・松沢資料館ニュース」No. 54、2002年6月、1-2頁参照。____、「境界線上の思想と実践」（『雲の柱』17号、2003年3月、賀川豊彦記念 松沢資料館）22-23頁参照。

カルヴィニズムの正統的神学であり、賀川は生涯その影響を受けていた。しかし、彼により強いインパクトを与えたのは、彼ら宣教師の心に宿るイエスの姿であった。この頃、彼はイエスの山上の垂訓に深い関心を寄せ、特に「野の花を見よ」に始まる、全被造物の存在に配慮する神の愛を語るイエスの教えは彼の関心を惹いた。また、トルストイ、安部磯雄、木下尚江などキリスト教社会主義者の著作を好んで読んでいる。社会の寄る辺なき人々の友となるキリスト教の福音の社会性もまた、賀川が福音書のイエスに見たもう一つの面である。²

キリスト教を単に個人の救いの宗教としてではなく、広く社会・世界・宇宙に関与する神の愛の宗教として理解する賀川のキリスト教理解は、賀川の宗教思想の一大特長であるが、その原型はすでに受洗当時の賀川に見られるものであったと言えよう。

III イエスの宗教

賀川の宗教思想の根幹を成すものは、イエスの宗教である。彼が神戸のスラム生活の貧困と多忙の中で取り組んだ研究は『基督傳論争史』（1913年）³であった。これは、アルバート・シュヴァイツァーの学位論文であった『ライマールスよりヴレーデへーイエス伝研究史』の邦訳に独自の研究をもって増補したものである。シュヴァイツァーは「神の国」到来をめぐるイエスの思想への関心からこのテーマを取り上げたのであるが、そもそも史的イエスの研究は不可能である、という意外な結論になるとともに、イエスはその到来を待望していた「神の国」は徹底的に未来的なものであると結論づけた。賀川はシュヴァイツァーのイエス伝研究に積極的関心をもちつつも、その徹底的に未来的な終末論に異論を唱え、「進行的終末論」を提唱する。つまり、神の国は神のわざであるとしても、それは歴史のなかに実現しつつあるものであり、人間は地上に神の国を建設する課題を与えられているのである。もっとも、シュヴァイツァー自身は現在を終末の時までの中間時として、「われに従え」と呼びかけるイエスの声をもって著書を結ぶとともに、その声に応じて、赤道直下ガボンのランバレーネに行き、そこで医療宣教師としてその生涯を全うしたのである。

賀川は『基督傳論争史』をつぎのように結んでいる―「我等が罪に煩悶して居る時、世の終末は現実の事実である。・・・彼[イエス]は、初めから、罪人の友であったのだ。彼は罪を忘却した学者、罪の無いパリサイ宗の徒には解せられ無かった。そして永遠に彼らに解せられるまい。が、彼は永劫に渡って我等罪人の友又救主として、我等の側に立つ！ イエスよ、汝の名は何と優しく響くよ、実に、汝は神の子、凡てに勝って崇めらるべき者である！」⁴

これはもはや研究の結論と言うより、キリスト神秘主義とも詩的信仰告白とも呼ぶべきものである。だが、賀川はイエスのように生きたいとの思いから、その呼びかけに応じて、神戸新川に入っていったのであり、その後の社会活動の根底にはこのような宗教思想があったことは確かである。賀川はこう述べている。

あなたが、真の自我と、生命と労働に帰り、ナザレのイエスに帰って来るならば、

² 賀川豊彦『キリスト山上の垂訓』（昭和2年）（『賀川豊彦全集』第3巻所収）を参照。

³ 全集第1巻所収。

⁴ 全集第1巻、134頁。拙論「賀川豊彦の『神の国』を考える―友愛社会・協同組合の構築へ」（季刊『at』15号、42-52頁）参照。

丁度スイッチをひねれば電気が交流するやうに、あなたの中に今迄味はなかった神人融合の喜びが泉の如くに湧き上がることを知るであろう。書齋から、暗い屋内からあなたがもう一度、田園と工場と街頭に出るならば、どんなに悲しくても、イエスの宗教がイウアングリオン（福音）であることが充分に分かって来るであろう。⁵

イエスの宗教は、俗の俗なる中に、神が人間を経験して、凡ての日常生活を聖くすると云ふのであった。宗教者であるのに、社会運動をするのは俗物だと或人は云ふかも知れぬが、イエスの弟子であるから、私達は社会運動をするのである。⁶

序上の記述において「田園」と「工場」および「街頭」が並び記されていることは興味深い。「私はイエス・キリストの弟子となった。そして、山上の垂訓をとり入れて以来、自然は私にとって非常に親しむべきものとなった。山を仰いでも、顕微鏡を覗いても、どこにでも私は神を見るのである。」⁷と賀川は語り、独自の眼差しで宇宙に目を向ける。「宇宙の法則中に一つの補償作用がある。宇宙意志の裡に一身体に異常が起って有毒物が或箇所に来ると、無数の白血球が其箇所集合して来て、防禦線を張り、敵と戦ひ、自らを殺して身体の保全を計る一つの生理的救済作用があるが、それと同じやうに一苦痛を癒さんとする法則が実在することを発見して、祈禱と瞑想とを一つにした救済宗教を確立されたのがイエスの宗教であった。」⁸

同様に、賀川は、社会における補償作用を「人格的白血球運動」と呼び、イエスを「人格的白血球運動者」と呼ぶ。彼がキリスト教信仰の中心的な内容として強調してやまなかった「贖罪愛」や「贖罪愛の実践」は比喩的に言えば「人格的白血球運動」にほかならない。

賀川は、このよう社会的にも自然的にも広く開いたパースペクティヴのなかでイエスの宗教を理解し、「私の一生の研究題目は、『宇宙悪』の問題であるが、十六歳の頃から此問題が私を執へた。そして私は、悪の方面から宇宙を研究した時に、悪を跳ね返して進む一つの力が、其中にあることを発見したのである。」⁹と述べている。事実、彼がライフワークとした『宇宙の目的』は、1958年、死の二年前に毎日新聞社から出版された。¹⁰

IV 「宇宙の目的」

賀川自身にとって、『宇宙の目的』は彼の思想を総合的に集約し、表現したものであるという意味で文字通り畢生の著作となったと言える。だが、数学、原子科学、物理学、地質学、生物学、化学などの自然科学、社会、倫理、宗教などの人文科学や社会科学の知識を駆使した本書の内容は一般読者にとって頗る難解であり、他方、専門家には単なるディレクティブに過ぎないとの批判を受けてきた。科学者が宇宙や生命体を観察し、その中に法則を見出すとしても、目的や意識や意志をそこに読み取ることはしないであろう。

⁵ 『イエスの宗教とその真理』（1921年）（全集第1巻所収）147頁。

⁶ 上掲書、151頁。

⁷ 上掲書、165頁。

⁸ 上掲書、190頁。

⁹ 上掲書、192頁。

¹⁰ 全集第3巻所収。本書の序文では、「宇宙悪の問題と取り組んだのは、私の十九歳の時であった」と述べている。「宇宙の目的」の理解について、雨宮栄一「思想家としての賀川豊彦」（阿部志郎ほか『賀川豊彦を知っていますか』教文館、2009年所収）を参照。

「賀川はこの宇宙目的論によって、自然科学から社会科学、さらに神学に至る全領域をカバーする一大思想体系を構想したわけである。しかしながらこの試みは失敗であった。」と、隅谷三喜男が賀川の科学的論理性を否定したとしても頷ける。他方、賀川の博識による科学的論証も、「かれに摂取された自然の解釈以上のものではなかった。したがって、かれの思想は実践となって現れた時には、問題の本質について、多くの人々に訴えたとし、詩となり、言葉となったときには、多くの人々を感動させた。」と隅谷は述べている。¹¹ 賀川自身とすれば、隅谷の後半の評価を多としても、「この試みは失敗であった」という前段の論断には些か、いや大いに不満があるのではないか。筆者自身は自然科学は言うまでもなく、社会科学についても、内容に即した評価をすることはできないし、賀川のディシプリン横断的な総合的展開についても、評価し得ない。しかし、私見では、賀川のいささか乱暴とも思える手法には、宇宙とその中に存在する無数の生命体の神秘とでも呼ばざるを得ない複雑な構造やそこに存在するある法則性を見る方法として、興味深い可能性を感じるのである。また、進化について、優勝劣敗による適者生存のみでなく、賀川が指定するように、弱い種が相互に助け合って生き残り続けてきた自然界の事実の観察も、興味深い。

いずれにせよ、隅谷が言う「自然の解釈」とは、換言すれば、自然哲学であり、その意味で、そこにこそ賀川の思想的独自性がある。そもそも、『宇宙の目的』の著者自身が、序において、「私の宇宙の見方の一端をここに発表し、宇宙芸術の味わい方を世界の人々に知ってもらいたいと思う」と執筆の意図を述べている通りである。

賀川は若き日より、人間の悪性、病氣、貧困、死、さらに、さまざまの社会悪や自然災害など、これらを「宇宙悪」と総称して、その謎と解決と取り組んだ。そのために彼は、宇宙そのものを理解しなければならないと考え、そこに見られる自然環境、物質界における合目的的とも言える適合性、選択的傾向を見るのである。こうして、彼はそこに「宇宙の目的」に向わせる力、変化、成長、選択、法則などの要素の働きを見、その過程で発生する「ずれ」として「宇宙悪」を説明する。

宇宙の目的からみれば、悪の起源問題は明白である。それは宇宙目的に到達し得ないことから起るのである。宇宙目的は選択の組み立てによるものであるから、その選択の条件に微細な故障が起っても、悪は発生する。微細な故障の発生することは「有限」の世界においては、避けることはできない。しかし、有限の世界に組み立てが始まり、「生命」が生まれ、「生命」の奥に「精神」が出生し、「精神」が無限絶対に至るまで接近しようとする意欲を起こしたことは勇壮なものであるとせねばならない。

そしてまた、人類の精神史において、悪の解脱と救済が宗教の形で、信じられてきたことも、忘れられてはならない事実である¹²

かくして、賀川は以下のように本書を結んでいる—

宇宙に目的ありと発見した以上、目的を付与した絶対意志に、これから後の発展を委託すべきだと思う。さればと云って、なげやりにせよという意味ではない。私は、人間の意識の目ざめるままに、すべてを切り開いていく苦闘そのものに、超越的宇宙

¹¹ 隅谷三喜男『賀川豊彦』（岩波書店、1995年）196頁。

¹² 全集第3巻、452-453頁。「無限絶対」は「絶対意志」とも表現され、「神」を指す。

意志の加勢のあることを見いだすべきであると思う。¹³

因みに、賀川は聖書解釈において重大な危険を冒すことになったと、隅谷三喜男は次のように述べている—「創造者である神と、被造物である宇宙＝自然とが連続的にとらえられ、被造物である自然が否定的な契機なしに賛美される危険である。それはかれの自然科学への関心が、自然法則を直接神の秩序として理解するようになる危険ともなっている。」

¹⁴ バルト神学に立つ隅谷の、自然神学をめぐる問題意識として、当然の指摘ではある。前述の「神人融合」のように、賀川にはプロテスタント神学から見るととき危うい表現は少ないことは確かであり、むしろそれだからこそ、彼の神秘主義的な傾向を評価する向きもある。しかし、私見では、根本のところでは、賀川は人格的神の聖書的理解に立っており、汎神論者でないことは確かである。

『私』以上の『生命』の『力』は私の神である。私は之を拝む。¹⁵といった表現にも同様の危うさを感じるが、『宇宙の目的』に見られる賀川思想との関連で読めば、その意図がよく分かる。神は、賀川にとって、「存在の根拠」(P. ティリッヒ)なのである。それは彼の次の文章からも諒解される—

「生命」を物質的に分解せんとする人がある。しかしその時には生命は生命では無い。それは条件であり、具備すべき約束であって、「生命」そのものではない。「生命」は「生」きる可き世界であって、論じたり、考へたりする世界では無い。それは刻々進んで行く世界である。

それは目的の無い世界であるかの如く見える。然しそれは「私」として意識することによって、内的目的を持って居る。・・・

私の神は死なぬ。それは「生」であって「死」では無い。私は死ぬ。死ぬのは「私」であって、「生命」では無い。「私」が「生」きて居た後に、「生命」が私を他の世界に運び去るだけのことである。「生命」そのものには少しも変動は無いのである。¹⁶

¹³ 上掲書、454頁。この結びの言葉に見られう思想は、別言すれば、賀川の「神の国」とその実現に関する思想(後述)を意味する、と言えよう。

¹⁴ 前掲書、188頁。

¹⁵ 『生命宗教と生命芸術』(大正11年)(全集第4巻)50頁。賀川における宇宙悪と「生命」については、鶴沼裕子「賀川豊彦における『悪』の問題」(『賀川豊彦学会論叢』第14号、2005年、61-81頁)を参照。

¹⁶ 上掲書、51頁。昭和35年4月25日、賀川の通夜の式で発表された彼の遺稿「天に帰る」はこの思想を表現したものである—

地上の悲しみをのがれて天に帰る者は悦びを持つ。選挙運動もしなくてもよい。愛欲のきずなをたち、地位、名聞を離れて天に帰ることは光栄の中の光栄である。弱き肉体に支えられ、不安と激闘を貫いて、神と歩んだ短い生命が天に帰って行く。思えば勿体なくなる。死は灰になることではない。慈愛深き天の父に帰ることである。

地上の生活は代数の方程式と似たものである。係数もあり、符号もある。しかし、その奥にある「根」(ルート)は変わらない。宇宙の創造主が企画し給うた筋道を人間が勝手気儘に変更することはできない。多次元の世界は複雑に見えても、神の「根」(ルート)に還元すれば、そう複雑なものではない。そこでは不滅の愛の世界が邪悪の世界をすら清浄に鑄換えてくれるのだ。

凡ての生命は元素に復帰し、そして原子は不滅である。この不滅なるもので人間が出来ていることを信じる者には不安はない。法則も、エネルギーも、凡て不滅である。「生命」の原理も「合目的」の世界も不滅である。この不滅なるものは集合離散の世界を超越して永遠なるものに我らを繋いでくれる。我らは臆病たることをやめて、この無窮の愛につながればよいのである。そこに天がある。相対世界の奥に隠れた絶対者が居る。

天は我らのうちに内在してくれる。この心の中にまで内在してくれる天に私は帰るのだ。凡ての恐

V 「神の国」とその実現

上記注13において言及したように、絶対意志（＝神）はその意志を実現しつつある。しかし、それを自覚した者はその実現に参画しなければならない。イエスの中心的メッセージはこの「神の国」の到来であった。それは、イエスにとって、愛と義の神が支配する現実であり、来るべき天上の時に属するとともに、すでにいまその雛形として、地上に実現しつつある現実であった。¹⁷それは、当時のユダヤ教社会の価値基準から見ると社会的無資格者であった人々の友となり、その人間性回復のための解放者となったイエスの人間理解に基づく現実であった。その意味において、イエスの「神の国」は優れて社会的な福音であった。

キリスト者賀川は、「神の国」を核心とするこのイエスの宗教に心を惹かれ、彼もまた、イエスの足跡に従って、救霊・救貧の活動に身を投じたのである。彼が後に組織した「イエス団」や「イエスの友会」、精力的に展開した「神の国運動」などは、彼の「イエスの宗教」の実践であり、イエスの「贖罪愛の実践」の、彼の現代的実践にほかならなかった。¹⁸その意味では、賀川の宗教とイエスの宗教は時空を越えて重なっており、賀川もまた、神戸の貧民街に住み、そこに暮らす貧しい人々、病める人々など、彼が「最微者」と呼ぶ人々の友として、彼らの人間性回復のために闘ったのである。

すでに述べたように、彼は後に数々の防貧運動を展開するが、救貧の思想を過去のものとしたのではなく、両者は連続していたと筆者は考える。彼が防貧としての協同組合運動に「神の国」運動のもっとも望ましい道を見出し、「一人は万人のために、万人は一人のために」（愛と協同）というスローガンのもとに相愛互助を訴え、友愛の共同体を建設しようとしたとき、彼は組合員同士の互助に限定するのではなく、広く社会の改良を目指し、非組合員への隣人愛の実践をも志していたことは間違いない。賀川の場合、イエスの「よきサマリヤ人のたとえ」に見られるように、家族や民族、宗教や国家を超えた隣人愛の実践を範としていたのである。つまり、隣人みにおける「内」と「外」が乗り越えられているのである。したがって、賀川にとって、友愛は、キリスト教兄弟愛に根ざしている。それは、同時に、キリスト者同志の関係に制約された隣人関係ではなく、まして、制度としての教会の枠内に閉ざされるべきものではない。

その意味において、賀川豊彦の思想と実践は、優れて個的に内的な求心性とともに、広く他者に開かれた遠心性をもつものであると言えよう。

怖、凡ての危険、死、災害を天が追払ってくれる。組立てられた人格の世界—靈魂の世界は、組立てられた空気が無窮であるように無窮である。見えなくとも空気は作用する。そして、死を越えて「靈魂」は天の使命を伝達する。私は靈魂の不滅を信じている。(全集第24巻、451頁)

¹⁷ 拙論、「賀川豊彦と『神の国』」(『賀川豊彦研究』第48号、2004年)；古屋安雄『神の国とキリスト教』(教文館、2007年)参照。

¹⁸ 拙論、「賀川豊彦と神の国運動」(『賀川豊彦学会論叢』第14号、2005年、82-104頁)および上記注4の拙論を参照。